



第35回

思考をくすぐる

子どもたちとワークショップをする中で感じたことを発信したいと始めたこの連載も、早いもので5年目となります。今シリーズではワークショップの中でよく受ける質問について、僕がどのように考えているかお答えします。

きえるって
むしろいかも!?

”正解”が 1つでない問い

現代の複雑な社会問題は、「正解がない問い」や「正解が1つでない問い」と形容されることがあります。誰ひとり取り残されることがない課題解決ができる力を育てるために、学校で扱う課題についても探究的に、あらゆる角度から答えを模索していくことが求められるようになってきています。3月に開催したジャパンGEMSセンター20周年記念講演会でも、そんな問いに出会いました。

カリフォルニア大学の前ジャパンGEMSセンター担当スタッフのトレーシー・シールズさんが、コロナ禍のオンラインワークショップを紹介してくれたときのこと。とりわけ興味深かった問いが「3種類の生きものがいて、足の数の合計が12本になるんだけど、どんな生きものがいると思う?」というもの。みなさんならどう答えますか?

子どもたちは「タコが1匹と、あとは…」 「ちがうよ! ウマが1匹とね…」と口々に答えます。でもこの問いに

は答えがたくさんありますよね。タコ(8本) + ネコ(4本) + ヘビ(0本) でもいいし、ウマ(4本) + アリ(6本) + ペンギン(2本) でもいいのです。こんなにもシンプルな問いでありながら、考え方の多様性や、それが尊重される感覚を味わうことができるのです。なんて素敵な問いなのでしょう!

何のために問うのか

わたしたち大人は、さまざまな目的で子どもたちに問いを投げかけます。こちらが伝えたことを覚えているか確認するため、子どもたちが何を考えている



か知るため、子どもたちの力を育てるため。大昔から教育の中で問いは大切にされてきました。

特に大切にされてきたのは、子どもたちの可能性を伸ばすために問うということです。大人が安心したり満足したりするために1つの「正解」にたどり着くことをゴールにした問いではなく、子どもたちが考えること自体を楽しめるような、さまざまな答えの可能性がある問いを贈りたいものです。

そんな問いを通して考える楽しさにふれた子どもたちが、やがて自分で自分の思考をくすぐるような問いを見つけて、彼らがつくっていく未来の社会も豊かになっていくはず。そんなことを思いながら、あそび心のある問いを日々考えています。

鴨川 光

(かもがわ ひかる)

1987年茨城県生まれ。ジャパンGEMSセンター主任研究員。早稲田大学大学院教育学研究科修了後、2013年6月より現職。子どもの思考力や社会性の発達について研究している。ワークショップやボランティアを通して子どもたちと一緒に成長中。

